

第3回芸術文化振興ビジョン検討委員会 議事録

日時：平成27年1月13日（火）13：30～15：30

場所：県民会館7階 亀の間

1 開会

2 開会挨拶

林芸術文化課長が挨拶を行い、芸術文化振興ビジョンの改定に向けた最終案の審議を依頼した。

3 資料説明

協議に先立ち、パブリック・コメントの結果等を踏まえて取りまとめた芸術文化振興ビジョンの最終案について、資料に基づき事務局が説明を行った。

4 協議

- 県の情熱や熱意が、市町や地元で実際に活動している団体等の方にうまく伝わっていくのかどうか心配している。市町や団体等との連携という意味では、県の取組だけでは限界があるので、ビジョンの意味や内容をしっかり周知することが重要である。予算の問題も関係すると思うが、もう少し具体的に市町や団体との連携について、強調すると良いのではないかと。
- 第I期ビジョンの成果と4つの基本方向、これから実行する重点項目が2段階で書かれており、よく読めばわかるが、読み通すのは大変である。P9の役割分担の表にあるような人たちにきちっと届けていくことが重要である。自分たちの場所でこのビジョンとどう関わっていけるか、どう文化を高めていくことができるか、ということ届けて、少しでもたくさんの方が思いをもって動けるような方向性が大切である。そのためには、冊子の抜粋や、もうちょっと深く知りたい人のためにはもう少し詳しいものを作るなど、実際に活動している各市町の関係者等に届けるための手法が必要だと思う。
- 「学校教育との連携」という言葉があちこちに出てきている。基本的な考え方にもあるように、音楽や芸術、文化が人々に勇気を与え、子どもたちの豊かな心の育成に不可欠だという思いがあり、学校教育との連携というのは外せないと思う。しかし一方で、学校現場は非常に多忙である。国際的な学力調査の結果等が出て以来、文科省が舵を逆に切り、授業時数も学習指導要領の内容も実際に増えている。そのような中で、子どもたちが芸術文化に親しむ時間を持つことは難しい。学校の現状と今後進めていくべき芸術文化活動をどうすり合わせていくのが重要である。この点について、事務局の方でも良い案を出していただいて、工夫を図ることが必要である。兵庫がめざす心豊かでたくましい人を育てるためには芸術文化が必要という認識は学校にもある。
- 阪神淡路大震災から20年ということで、県内の文化財と防災について検証していくことも、文化財保護という点で重要である。

- 東京オリンピックへの対応と書かれているが、市町に対する必要な協力ということであれば、まだ決まってはいるが、神戸市が神戸サミットを打ち出そうとしている。誘致できることになれば、そのようなものへの対応も必要になる。その他 100 万も集まるような大きなイベント（神戸まつり、神戸ビエンナーレ、デカンショ祭、淡路花博等）についても県が協力することを考えてほしい。
- 例えばバルト三国のエストニアでは国を上げて大合唱会をやっている。兵庫県では幼稚園から小・中・高校、大学、一般までの優秀な人が一同に介して開催しているものは少ない。兵庫県大合唱祭のようなものを企画してはどうか。
- ツーリズムや観光に関連し、例えば兵庫には有馬、城崎、湯村温泉等の名湯があるので、そのような名湯巡り等に京都芸能を取り込むなど、伝統芸能と観光のコラボ等を考えてはどうか。
- 昨日NHKテレビでコミックマーケットについて放送していたが、56 万人もの若者が集まってきた。若い人たちに文化を知ってもらう対応が必要である。
- 兵庫県が全国の中でどれくらい芸術文化に力を入れているか分からない。住んでいる人は自分のところの良さはなかなかわからないものである。兵庫には芸文センター管弦楽団やピッコロシアター等があり、震災後このような芸術文化が兵庫の元気を作ったと聞いたことがある。そのような原点に帰って、この度県議会にかけるとのことなので、芸術文化の予算を削らないようお願いしたい。予算というのは、実際県がどれだけ力を入れているかということが反映されるものだと思う。日本は芸術文化にかけるお金が少ないと言われているが、そのような中で、兵庫県はこれだけお金をかけているということを形として見せてほしい。そういうところの意識を拡げることは、ベースを支える意味でも重要なことである。「文化経済学」という学問があるが、先日「金沢 21 世紀美術館」に行ってきたら、美術館がまちをつくるという素晴らしい取組をしていた。今経済に引っかけないと予算が削られていくという風潮がある。文化芸術はいろんな取組の横軸において考えなければならない。今後ビジョンを進めていく中でそういう意識を拡げて確固たるものにしてほしい。
- 県議会の議決対象になったことにより、執行側だけの意思だけでなく県民の代表である県会議員の意味も巻き込むということで、このビジョンが非常に力強いものになる。
- このビジョンは「地域」「伝統」「教育」の 3 つがキーワードである。音楽や美術、演劇などの共通の芸術文化は、県内でも一極集中、つまり阪神間にいろいろな資源を集中させるのではなく、アウトリーチを展開していくことが大切である。また、地域にも素晴らしい人がいるので、その人達によって展開する、こちらからおしかけていくこともそれはそれで機会を付与することになり大事だが、地域におられる方を使って展開していくことがこれから必要である。その意味で、アートプロジェクトをネットワークでつないだ取組は一つのきっかけになる。音楽等も地域でやっておられる方がたくさん出てきているので、それを広域的な取組として支援していくことは大切である。
- 但馬文教府や西播磨文化会館等の施設も生きがいつくりへの芸術文化の活用という点で、もっと活用していけばよい。

- 兵庫は5つの地域でそれぞれ特色ある文化があるので、それらをもっと出していったらよい。
- 華道や茶道等の共通的な伝統芸能は、文化団体等の力も借りて、教育の現場では難しいこともあると思うので、実際に実現可能なやり方を考えていかないといけない。個性的な伝統芸能については、地域のコミュニティとうまくむすびついて、地域の力をつけるためにもさらに力強い展開ができるのではないか。その一つに教育は大きな力を占め、教育現場は力強い味方になると思う。
- 防災の取組で、家の耐震補強をやると、家のデザイン上大変悪いことがあるので、例えば芸術工科大学の学生などと一緒におしゃれな、神戸らしい、兵庫らしい防災器具等を開発すれば、産業的にも機能すると思うので、そういう見地から芸術文化の振興を図っていくことも一つのやり方ではないか。
- 短期間でせっきゃくこれだけのものができても、ビジョンの冊子そのものは末端のだけが見るのか。これだけのことをしているということを誰が知っているのか。今後、広報、周知について、人的なものも含めて整備する必要があると痛感する。
- 施設の整備というところを見ると、やはり但馬には美術館がない、すごい作品を持ってこられるところがないなと思った。じゃあやはり廃校の学校を使ってやろう、というような創意工夫がビジョンによりできるようになるのかと思う。それがP25で取り上げられているようなことである。そういう評価を実際にされている方にも降ろしていくことが大切である。
- P30にある但馬文教府の但馬文庫はとても良い蔵書の数々で、但馬以外の人にも見てもらいたいぐらいだが、実際に地元の人が知っているのか疑問である。誰がするのか、する人達がわかっているのか。今まで学校の先生を中心にやっていたが、既存の人は今までのことではいっぱいなので、それ以外の民間等で意識が高い、子供のことをよくわかっている人を巻き込んで、コミュニケーションをとってやってもらえるとありがたい。また、播磨学研究会や但馬学研究会等も高齢化ということもあり、メンバーを募っているがなかなか集まらない。これだけ素晴らしいものがありながら地元ではあまり知られておらず、それだけの重きを置かれていないのが現状である。せっきゃくこれだけのものを作られたので、ソフト整備もお願いしたい。
- 第I期ビジョンと改定ビジョンとの違いをもう少し明確にしてもよいのではないか。芸術文化と市民の関係等、フェーズが変わってきている。その点がもうちょっと出ても良い。たとえば基本方向は同じように1～4までであるが、「文化力を高め、地域づくりに活かす」というところではいろいろ意見が出ている。やはり芸術は遊離したものではダメで、経済にも関わるし、地域にも係る。一方で伝統的な華道や茶道のメンバーが減ってきているという現実もある。もう一度暮らしの中でどうやって作っていくか、地域とどう絡めていくかということところが弱いと思う。重点取組項目にそのまま生きていない。重点は重点としてあり、せっきゃく基本方向の3や4がこれから大事になるだろうと思うが、そこと重点との関係がすっきり来ない。その点が新しい時代にどう対応していくかということが見えづらい。そのあたりは県民の方も、何をどうすればよいか、何が足りなくてどっちの方向を向いているのかわかり

にくいかもしれない。あるいはキャッチコピーをつけるなど、何が変わっていくのかというところを見せる必要がある。箱物は十分でき文化的に潤っているところもあるが、他の地域でもそのようなことはありうるという、そのような事例が実は沢山書いてあって素晴らしいと思う。それを推し進めるために何をすればよいかというつなぎの部分、それらを具体的にどうするか、例えば出石等は頑張っているが、基本的には蕎麦や陶器があつていろいろなものと連携してやっており、そういうところは活性化している。そのような連携の後押しをどうやっていくかということがビジョン策定後に議論されなければいけない。ビジョンの中にも入っているが、基本的な部分を踏襲すると言ってしまったので、逆に変わった部分が変わりづらいというのが、このビジョンの弱いところである。変わらないといいつつ変わったところを見せるには一工夫いるのかなと思った。

- やはり芸術文化といってもお金と場所だと実感している。震災をきっかけに立ち上げた「神戸元町ミュージックウィーク」は17回目を数えた。元町商店街では、去年33回目を数えた「夜市」に継ぐ行事になってきたので、これからも続けていきたい。
- 姫路城のことがp30に出ているが、2008年に菓子神戸組合が姫路城周辺で菓子博をしたが、その時に本物の姫路城の50分の1のサイズのお菓子を完成までほぼ2年かけて作った。博覧会が終わったあと、県の菓子工業組合から姫路市に寄附し、しばらく姫路駅の北側に飾っており、その後イーグレ姫路に預かってもらって、城の工事中もみなさまに喜んでいただいたが、イーグレにも置けなくなってきた。そこで今置いていただけたところを探している。2月末が期限であり、引き取ってもらえないと潰されると聞いている。
- 文化といっても食文化等様々なものがある。今や文化は地域づくりに欠かせないものと実感している。京阪神では大きなホールがたくさんあり、外国のアーティストの催し等もたくさんあるが、中山間地域に行くとそのような文化にふれる機会が少ない。ところが先日丹波に行くと、Iターンで若いアーティストの方がたくさん住んでおり、そこから自分たちの芸術を発信しようとしていた。新しい芸術文化が生まれつつあるのかなと思う。ITの力が大きく、今やどこに住んでいても発信できる時代が来ている。そのような地域の若者のアーティストを応援できる仕組みができればよい。姫路の文化センターが移設し、非常に大きなホールができると聞いている。NPOは、このビジョンを見て、自分たちのやっていることがどこに関わっていくのかいつも気になっている。ビジョンをみて、ここを伸ばしていこうと思うきっかけになるような冊子ができ、それを活用できればよい。
- 新温泉町から鳥取方面に少し行ったところに丹土という地域があり、お盆の時期に盆踊りをやっていた。丹土の盆踊りというのは非常に優雅な踊りで確か県の無形文化財になっている。その盆踊りのために県外に出ている若い人たちも帰ってくる。それは、えも言われぬ雰囲気非常に優雅な盆踊りであったが、それが今どうなっているのか危惧している。ビジョンの中に時代潮流の変化とあるが、今後どんどん人口が減少していき、特に但馬や西播磨、淡路等は既にどんどん減っていつているなかで、文化面でも偏在化の恐れが強い。人口が残る神戸阪神間だけが残って行きかねない。県内各地の文化をどう守っていくかということは、不退転の決意でやっていかないといけない重要な時期に直面している。例えば但馬の山奥にも文化があり、地元の人とその文化を非常に愛しているというようなものがあれば、そのような県内各地の文化をどう守り、応援していくのかということが大事である。一極集中の東京を頂点とするようなところに引っ張っていくという対応ではなく、それぞれにカラーがあ

り、歴史があり、特色がある多様な文化をどのように守っていくかということのを大事にしてもらいたい。

- 先週の土曜日から新長田でビエンナーレのプレイベントをやっている。これは丹波篠山、たつの、あさご、西宮船坂のビエンナーレをひっばってきて、それぞれバラバラでやっていることのエッセンスを持ってきて、それぞれのアーティストに自分たちがやっていることを活かしてやってもらっている。これはひとつのとても良い試みで、それぞれのところでやっていることを連携してやる。お互いに刺激をしあっていて、そこに来た人は、兵庫県にはビエンナーレ一つにしても多様な催しをやっているんだな、ということを実感する。そういうバックアップというのは非常に良いモデルケースだと思うので、是非そういうところにビジョンを活かしていただければ。
- 京都には、京都大、工芸繊維大、市立芸術大などがあり、文化面でもしっかりやってきており、今では素晴らしい世界でも一番人気のある都市になった。兵庫にはとても大事な“具体”というグループがあるが、長い間知られていなかったが、最近突如認められて50、60年間すごいことをやっていると世界に知れ渡った。県立美術館が“具体”のコレクションを世界で一番多く持っているということで、突如世界の檜舞台に立っている。県立美術館の海側には円形劇場を作っており、何とかしてこれを使ってもらいたいということで、向井修二氏というアーティストに記号を書いてもらうことになった。唯一県立で美術科を持っている明石高校の先生とお話して、生徒も参加し、二週間かけて円形劇場をすべて記号で埋めた。円形劇場が突如芸術の場になった。するとあそこで演奏したらということになり、ブルーノートの日本人唯一のトランペット奏者に実際にやってもらったら大変人気であった。その後明石高校美術科の生徒全員を集めて公演したところ、全員が感想を送ってくれた。これまで絵や芸術、デザインをしていても方向性、未来がわからなかったが、公演を聞いてすごく感動して自分も新しいことをやりたい、やれるんだと言ってくれた。やり方によって非常に変わるので、兵庫県中の高校にいつか公演しても良いと思う。ビジョンを作った以上は教育がなければこのまま文章になって消えていくのではないかと恐れている。いかに我々が実行していくかが大事。ぜひビジョンを通して兵庫県から教育の面で、10年計画でもよいので、地道に「芸術文化立県ひょうご」を作っていきたい。
- このビジョンはひとつづくり、芸術づくり、まちづくりなど網羅しているが、これだけ膨大なものを県民のみなさまにどうつないでいくか、これからがスタートだと思う。周知していくためにパンフレット等も大事だが、実際に動いていくことが大事である。ただ言葉で言うだけでなく、一つひとつ実際に実施していくこと、そのためにもその地に住む人達为中心となって、上からビジョンができたというのではなく、地元の人がある活動がスムーズにできるような後方支援としてのビジョンの策定であってほしい。
- 学校教育の場で、ということがたくさん出てくるが、学校現場がどんなに大変であるか、文科省から降りてくる学習指導要領の変更の現状なども聞いている。その中で学校は学校でということではなく、一人ひとりの県民の人たちの中で子どもたちは学校に行っているという感覚を忘れずに、小さい子どもから大人まで、芸術文化に対してもっと積極的に動いていけるような具体的なものが何か、そういうことをコーディネートする人、リードする人の育成が大事だと感じている。

- ビジョン委員になり、自分たちの活動がこのビジョンの土台の上に乗っかってやるんだなと思うととても嬉しい。実際に芸術活動や文化活動をされている人が読めばそのように思うだろう。それだけ県に期待をしている。
- 先日放課後子ども教室の事業で頼まれて、子どもたちに人形劇を見せたいが予算がないのでどなたかやってほしいということで行ってきた。仲間の中に人形劇をやっている人がたくさんおり、その時もアマチュアとは言え、二十数年活動していると力のある人達をコーディネートした。しかし、行政がそういう人達を頼んだ時の謝礼などの基準がまだない、ということが現実に行ってみて分かった。アマチュアなので多額ではなく、実費程度のものだが、それも難しいというところもある。こういうものができた時、最低限の支え手というのがここにあるのかなと実感した。
- これから末端の部分で活動が広がっているところをどう整備していくかということが課題だと思う。西宮で、赤ちゃんをおんぶして演奏しているアマチュアの団体がある。活動場所はピッコロ等あるが、ハードの面は整ってきたということだが、今ホールで小さい子どもを持って活動するお母さんたちが増えているが、おむつを替える、母乳をあげる場所がないというのが問題になってくる。そういう催しをやるときはそういうスペースを作ってやらないといけない。新しいお店に行くとそういうものが充実してきているが、公共のホールはそのところが充実していない。さらに小さいことだが、お父さんが赤ちゃんを連れて出かけることがあるが、男性トイレにはそういう場所がない、それも問題である。これから県内でいろいろな文化を発信する時には、小さいことだが変えられるところはぜひ改善してほしい。
- これからの芸術文化の振興に際しては、芸術文化、伝統文化や芸能の担い手を育成することや、教育現場でいかに本物に触れ、心を揺さぶる学びができるかが重要であると思う。幼少期に本物に触れることから始まり、学校教育においては、授業だけでなく部活動や課外活動などを通して学ぶこと。そこでは、優れた指導者、つまりプロフェッショナルが関わるということが命題である。
- 若手芸術家から伝統文化や芸能を継承する長老までが、次の時代を担う人材を育むための仕組みやコーディネートも重要である。また、様々な団体の力や施設を活用し、将来の芸術家や伝統文化を継承する担い手を育むことも大切であると思う。学校教育との連携では、教員に対する指導力の向上研修なども今後の取組として挙げられているが、プロフェッショナルが直接指導をする機会を増やすなど、もう一歩踏み込んだ取り組みを期待したい。
- 「市町に対する必要な協力」という部分があるが、以前の資料では「市町への支援」となっていた。「支援」という力を貸すという関わりから、「協力」という、力を合わせて取り組むという表現でコミットメントしたことは、県としても主体的に関わりを持ち、取り組みを推進するとともに、全県挙げてビジョンを具現化していきたいという意気込みを感じる。
- 子どもたちに芸術文化教育が大切なのはわかっているが学校現場は忙しいし、予算も大変という話があった。昔淡路にはおやこ劇場というのがあったが、そのあと洲本おやこ劇場というのは消えてしまった。こういうところをぜひ支援してはどうかと思う。12歳までに右脳は育つということや、子どもに本物の芸術を、というのは皆さん承知のことである。NPO等がどう関わっていけばよいのかという話もあったが、ずっと長い間活動している団体も兵

庫県にはあるので、そういうところと県がつながっていくことで子どもの文化が守られていくのではないと思う。運営が厳しくてどんどん潰れていっているので、そういう既存の頑張っているところを応援して連携することで、学校や公ができないことができる。運営部分だけでも担ってくれるだけでも良いものができるのではないかと思った。

- せっかくビジョンが固まってくるので、市町の計画、ビジョンとうまく連動させて、県だけではなく、市町にもこの思いをお伝えして、市町からもビジョンや計画が上がってきて、それとうまく融合できれば、県は県なりの支援策があるし、市町は市町でこういうところをひと押ししてくれれば伝統文化がさらに伸びていくという連携ができると思う。
- 兵庫県が全国に比べてどれだけ芸術文化の努力をしているかという資料を発表したことがあったが、こういうことについても HP でもっと活発に活動していけば違うと思う。世界的な経済誌「ロンドンエコノミスト」の最新号でも“On Demand Economy”という言い方を取り上げている。求めに応じているいろいろなことをやっていくということで、市民、消費者、あるいは芸術文化に携わっている人のいろいろな要求に応じて活動をしていくというのが非常に大きな課題となっている。その問題を経済に関連してエコノミストは取りあげたわけであるが、芸術文化でも同じようなことがたくさんあると思う。こういうことをとりまとめていこうとすると、IT がこれだけ発達しているので、IT の利用によってどのような要求があるのかということ、県の方でも取りまとめられるような体制づくりを芸術文化の領域について進めていくことが大切になる。
- 個々の県民、市町との連携を強くしていくようにという話もあったが、そのためには実際に活動している人の情報がお互いの間でわかっていないという状況もあるので、新聞やテレビでもどんどん報道していただく大変よく分かる。例えば先程の姫路城のお菓子に困っているというような話等、みんなが情報を知った上でどうすればよいかを考えていけるような仕組みを作っていけば良いのではないか。高校生の活動にしても、これだけ立派な活動があるということをほとんどみんなわかっていない。それをきちんと PR していただく。新聞が無理であれば県の方でどんどん IT を利用して流して、同時にみなさんからの要求をいつでも取り上げられるような体制づくりをする。IT が発展すると経済だけでなく行政にもどんな変化が起こってくるか、あるいは変化せざるを得なくなってくるかということ一度研究しておいて、それをうまく利用する仕組みを作っていくと、みなさんの要求を消化していくうえでも大きな役割が果たせるのではないかと思う。

5 諸連絡

最終案の確定までの進め方等について、事務局から説明を行った。

6 閉会挨拶

林芸術文化課長が、閉会挨拶を行い、全3回の審議に対するお礼を述べた。

7 閉会